

ハイマート Heimat

ぐんま日独協会 会報 創立30周年記念特集号

2019年2月15日

53号

発行者 鈴木 克彬

発行所 ぐんま日独協会

〒371-0105

群馬県前橋市富士見町石井 2445-219

電話 : 027-288-4297

E-mail : info@jdg-gunma.jp

ホームページ : <http://www.jdg-gunma.jp/>

ホームページの右下『ハイマート』から本誌をカラーでご覧いただけます。



【ぐんま日独協会創立 30 周年記念式典】

在日ドイツ連邦共和国フーツェ首席公使ご夫妻（中央）を囲んで

- | | | |
|--------------------|-------|------|
| 1. 会長のことば | | 2 |
| 2. 創立30周年記念行事 | | 3～4 |
| 3. 今後に向けて 誌上座談会 | | 5～8 |
| 4. ぐんまで翻訳というものをする | | 9～11 |
| 5. 創立30周年記念事業寄付者一覧 | | 12 |

★ 連載記事は次号以降で引き続き継続し、今回はお休みとなります

1. 会長挨拶

お互いの長所を認め合う日独交流に

・・・1.5 + 1.5 = 3への研修・探索・・・ 会長 鈴木克彬

明けておめでとうございます。

昨年11月には、協会員皆様のご尽力及び関係者方々のご協力を得て、無事、創立30周年記念式典及び行事を開催することが出来ました。当紙面をお借りし、ここに厚くお礼申し上げます。そして今般、新たに40周年・50周年を目指しスタート致します。特に本年は隔年開催の“ドイツフェスティバル in ぐんま”が第8回目の開催年に当たります。協会員皆様のご協力をよろしくお願い致します。

さて改めて世の中を見ると“少子高齢化”と“IT社会への変身”の波は、国境を越えて世界的にどんどん進んでいます。それに加えて世界的な“ポピュリズム（大衆迎合主義）”の思想が台頭し、貿易摩擦も含めて混迷社会に入りつつあります。その影響も受けたドイツは、更に難民受け入れ問題による政治的混迷・EU加盟国の赤字財政、EUからの英国離脱等、多くの難課題を抱え、メルケル政権の退任問題にまで波及しています。

一方我が国日本も、少子高齢化の荒波をうけ、社会保障費の毎年の増加等により、国家財政はバランスがとれず、毎年毎年赤字国債を発行し、国家財政は混迷化しています。また若手労働者不足の関係から、外国人労働者の入国・就労問題も発生しています。

ここに両国の日独協会も改めて考えなくてはならない時が来ているのではないかと思います。

日本とドイツは、ともに向学心が高く勤勉な国民です。その両国が相互交流・相互研修（例えば群馬ではドイツサロン等）をとおして、改めてお互いの長所を学び・整理し、更に発展していくことが、今日現在、大切な事ではないか、と考えます。そして地域では、ドイツ国及びドイツ人の長所・持ち味等を広く県民の皆様にご紹介し、1人でも多くの“ドイツへの理解者・ドイツファンをつくり出すことに努力する”ことを考え、皆様とともに行事を進めていきたいと考えています。

2. 30周年記念行事

平成30（2018）年11月11日（日）11時よりぐんま日独協会創立30周年記念式典が開催されました。当日は在日ドイツ連邦共和国大使館フィーツェ首席公使ご夫妻、全国日独協会連合会木村敬三会長代行ご夫妻をはじめ近隣の各日独協会代表者、群馬県及び県内関係行政代表者の方々が多数駆けつけてくださいました。

式典では西田治司副会長の開会のことばに続いて、独日両国の国歌を、ぐんま日独協会会員の原鏡さんが代表を務めるコール・詩音のみなさんに合唱していただきました。「両国国歌を合唱で聞かせてもらうのは初めてだが、とてもいいものですね」と参加者から賛辞のお言葉をいただきました。



【コール・詩音による両国国歌合唱】

鈴木克彬ぐんま日独協会会長挨拶のあと、フィーツェ首席公使から日本語での祝辞をいただきました。ぐんま日独協会が創立された30年前はご自身が日本に留学されていたそうです。市民レベルでの交流の大切さを述べられました。



【挨拶をするぐんま日独協会鈴木会長】



【祝辞を述べられるフィーツェ首席公使】

続いて元駐独大使で全国日独協会連合会会長代行の木村敬三様より弊協会が「各地の日独協会の中でも活発に活動している」旨のお褒めのお言葉をいただきました。公務の都合で出席できなかった知事に代わって、県企画部国際戦略課長・田谷昌也様から知事の代読を含めて祝辞を賜りました。同じく県議会議長からはメッセージが寄せられ、前橋市からは副市長から祝辞をいただき、式典は滞りなく終了しました。



【木村全国連合会会長代行】



【田谷国際戦略課長】

午後は記念コンサートの開催です。ぐんま日独協会ならではの趣向ということで企画を検討した結果、ドイツでの留学や演奏活動経験者（全員ぐんま日独協会の会員）の共演、そしてドイツで長年調律師として活躍した会員の経験を活かして「二台ピアノ」を行おうとの企画にまとまりました。更に、コンサートで披露する曲のドイツ人作曲家および演奏する会員の留学・活動拠点の都市紹介を行って「ドイツ音楽紀行」というタイトルにして二部構成の構想でまとめました。

第一部はヴァイオリン&ヴィオラ（小田原由美さん）、ホルン（小田原瑞輝さん）、ピアノ（田中悠一郎さん）の共演または独奏です。美しいハーモニーを披露していただきました。ホルンの独奏はあまり聴く機会がないと思われる貴重な機会でした。



【第一部の3人による共演】

第二部は澤田まゆみさんと渋川ナタリさんによる「二台ピアノ」および「連弾」です。二台ピアノは珍しい企画です。その一因が調律の難しさです。一人の調律師が2台のピアノを演奏前の短時間で調律する必要があります。この構想を持ち出したのが吉田博文会員です。ドイツで30年近く調律師として活躍をした経験がものを言いました。二台ピアノの豪快さと繊細さを初めて堪能された方も多いかもかもしれません。二台ピアノのあとは連弾です。これは馴染みのある演奏スタイルですが二台ピアノと連弾を同じステージで聴き比べられるという幸せを体験できました。第二部の最後に群馬県（栃木県発祥の説もあるがいずれにしても両毛地域）を代表する民謡「八木節」を披露してくれました。



【第二部の二台ピアノ】



【第二部の連弾】

最後にクロージングとしてラデツキー行進曲の披露です。演奏者5名全員に加えて企画推進した瓜生郷子会員が専門の打楽器を担当して参加しました。会場のみなさまの手拍子をいただきながらの感動的な演奏でした。



【クロージングのラデツキー行進曲の演奏】

演奏者のみなさま、および調律師の吉田さん、ありがとうございました。

3. 「ぐんま日独協会の今後に向けて」 誌上座談会

参加者：杉本隆雄、瓜生郷子、日向泰史、一場悠里、平方秋夫、宮原喜利雄、
近藤基晴（司会）（敬称略）

司会：ぐんま日独協会は1988年に創立され2018年11月11日に創立30周年記念式典および記念コンサートを行い、またこの30年の歴史をまとめた「30年のあゆみ」を刊行しました。これはひとえに在日ドイツ連邦共和国大使館、全国日独協会連合会、ドイツ文化センター、ドイツ観光局、群馬県をはじめとした地元行政等のご支援の賜物です。ここに関係者に対して御礼申し上げます。さて、この記念行事を終えて今後の課題は未来に向けてどのような方向性で進めていくかだと思います。そのためには日本やドイツを取り巻くグローバルな状況から、我々の日常の足元までを総合的に見ていく必要があるかと思えます。その中から今後の課題への糸口が見いだせればよいかなと思います。皆さんがドイツとつながりを持つようになったきっかけからお聞きしたいと思います。

まず私の場合は、もともと海外志向で総合商社に就職しました。最初はアメリカ向け輸出を担当し、その後欧州向け輸出担当になりました。その延長線上で当時の西ドイツ駐在となったということで、自分の意思というより会社の都合でドイツとのかかわりとなった訳です。定年退職後、東京から群馬に移住し、そこでぐんま日独協会の存在を知ってドイツとのかかわりを断ち切りたくない思いで入会しました。それでは次に瓜生さんからうかがいましょう。

瓜生：妹がまだ高校生の頃「音楽の勉強をするなら日本の大学より欧州で勉強した方がいい」と判断して妹のドイツ留学を応援しました。その責任から、妹の様子を見にドイツへ行ってみることにしました。それが東西の壁が崩れた2か月後のことでした。その時に自分もドイツで勉強したいと思うようになったんです。運よくあるドイツ人の先生の指導を受けることを認められました。ドイツでは妹もそうですが、日本人との付き合いを封印してドイツ人と交流するように努めました。



杉本：商社入社後、南米関係の仕事から始まって、その後ドイツとのビジネスを担当し6年ほどハンブルクに駐在しました。もともとドイツで仕事をしてみたいという希望を持っていたこともありドイツに惚れこんだんです。帰国してからぐんま日独協会の創立時に入会しました。当時は現役だったので離れた時期がありますが、2014年に仕事を辞めてからまたぐんま日独協会での活動を再開しました。



日向：自宅から通える大学を受験する許しを親からもらいました。特にドイツに興味があったわけではありませんが、比較的入学しやすいという理由でドイツ語学科に決めました。大学に1年間の交換留学制度があって、大学1年の春休みにドイツの語学研修に参加しました。就職後、2008年にドイツ駐在の話があったのですが、ドイツ支店閉鎖がきまったためオランダ駐在となりました。2015年に帰国してネットで検索してぐんま日独協会に入会しました。



宮原：子供の頃、シュバイツアーに関する本を読んでドイツという国を知ってドイツ自体に興味を持ちました。工業高校の時にドイツ人の発見による物理原則・原理が多いことを知りました。社会人になってからはドイツ歌曲のドイツ語の歌詞を調べたくなりました。近くにルーテル教会があって、ドイツ人に教えてもらおうと思ったが、それはかなわなかった。群馬に来てからぐんま日独協会に入ろうとしたが当時はまだ敷居が高くて断念したことがありました。



一場：2015年8月に初めてドイツに行ったんです。子供の頃にきれいなドイツの街並みの写真を見ました。また、東山魁夷の絵やノイシュバンシュタイン城の写真でドイツに興味がありました。高校の友人でドイツに留学した人がいた。大学では英語を専門に勉強して、アメリカの短大に留学した経験もあります。社会人になってから、テーマパークで働いていて外国人と接触してからヨーロッパに再び興味を持つようになりました。アメリカ留学の経験があったので、欧州では英語圏じゃないところに行きたいなと思いました。では具体的にどこにしようかと考えた時に、実はイタリアが希望だったのですがイタリア語は巻き舌の発音で苦勞するので除外することになりました。フランス語との比較でドイツ語は文法や発音が比較的簡単だと思ってドイツにしたんです。



平方：英語の教員だったことから海外との付き合いは長年ありました。イギリス・アメリカを中心に語学研修で生徒を送り出して、そんな関係でその付き添いでも行ったことがあります。趣味の音楽でワーグナーが好きでLPレコードを集めたほどで、そこからルートヴィヒ2世にも興味がでてきました。退職後、旅行が好きで欧州5か国を2週間で回るツアーに家族全員で参加しました。その5か国の中でドイツが一番よかったというのが家族全員一致した感想でした。街がきれいで几帳面なところですね。そんなこともあり、かねてから気になっていたルートヴィヒ2世を調べたいということでぐんま日独協会に入会しました。入会後にはドイツ人のホームステイも2回受け持ちました。



司会：みなさんのドイツとの付き合いのきっかけをお話いただきました。当然ですが、人によっていろいろなきっかけがあることがわかりました。ここで、日独交流の歴史を大きな流れで捉えてみ見ると、江戸時代から始まって「第2次世界大戦まではひたすらドイツから学んだ時期であり、大戦後に初めて真に相互交流と呼べるようになった」（横浜日独協会理事・慶応義塾大学名誉教授・寺澤行忠先生『ドイツに渡った日本文化』）訳ですが、そんな状況の中でも、ぐんま日独協会が生まれた時期はまだドイツに学ぶ雰囲気が強かったと言えます。今はマンガ・アニメを中心に日本からドイツへの影響が強まっているとも言えます。日独交流の始まりから長い期間、医学がその中心になっており、ぐんま日独協会が誕生した頃は医師が会員の多くの割合を占めていました。現在は音楽関係者や一般県民の割合が相対的に増えています。音楽関係者の立場から、瓜生さんはドイツとの交流はどう見えていますか。

瓜生：留学先はクラシック音楽でも分野や楽器によって事情が違います。例えば、オーケストラの勉強ならドイツ、ソロならアメリカ、歌の場合はイタリアなど様々で、師事したい先生との関係も大きいです。ですから必ずしもドイツということではありません。ただ言えるのは、ドイツの大学に留学する場合は授業料が無料であることは大きいですね。アメリカの場合は天才を育てる、ドイツは努力をする教育。音楽には国境がない。

宮原：一般の音楽趣味の人のきっかけとしては「第九」が結構多いですね。ぐんま日独協会でも第九をやったり、ドイツ製品を集めて展示することも面白いかもしれません。

瓜生：その流れでいうと、ドイツ時計の部品の解説もぐんま日独協会としては人材がいますね。

日向：敷居が低いという意味では食が一つのきっかけとなるでしょう。ドイツパンのなりたちやバラエティの説明会・体験会など。

一場：若い人は写真（インスタグラムなど）の影響力が大きいのでうまく活用するとよいと思います。



司会：いろいろなアイデアがでてきました。そんな中、日本の若い世代はどう感じているのでしょうか。JG ユースネットワーク（全国日独協会連合会傘下での若手の組織）では若手の会員を増やすためにどのような取り組みをしているのか、日向さん説明してください。

日向：各地の日独協会の会員で 35 歳以下が正会員となれます。それ以上の人でも準会員として参画出来ます。日独協会と独日協会との定期交流や、一般の人が興味を持つようなことをキーワードにしてイベントをやっています。去年は香川でドイツソーセージに関するセミナーをやりました。

瓜生：澤田まゆみ会員が大学のゼミでレープクーヘン作りの企画をしました。女子大生が興味をもてるイベントの一つの例ですね。

宮原：ぐんま日独協会では「クマさんづくり」が一つの好例ですが、もっと外部に見えるような形で宣伝したらどうでしょうか。

一場：ドイツだけに照準を合わせるだけでなく、街中のイベントとコラボするのも面白いと思います。

日向：パンだとか、ワインだとか楽しむイベントを小規模でやるのも一つの可能性ですね。



司会：みなさんいろいろな経験と見聞をお持ちの方々の集まりです。これらをつなぎ合わせると物凄い力となります。これらを繋ぐことにより喜びも大きくなり生き甲斐にもつながっていくと思います。歴史のこと、文学のこと、車のこと、料理のこと、サッカーのこと、いろいろあります。そんなことを「ドイツフェスティバル in ぐんま」という大掛かりなイベント以外の場でも小規模ながらやるというようなアイディアは今後具体化に向けて検討していく必要がありますね。予定の時間を既に大幅に超過してしまいました。それだけ、いろいろなアイディアが出てきました。大変ありがとうございました。今後、広く会員の皆さんのからもご意見を頂いて具体化に向けて進めていきたいと思っています。引き続きみなさんのご協力をお願いして座談会を終了します。



4. ぐんまで翻訳というものをする (長谷川早苗 記)

ある日、平日に友人とランチに出かけたとき、「今日は仕事休み？」と聞かれました。私はドイツ語を日本語に訳す仕事をしていて、相手もそれを知っています。「？」と思いながら「いや、締め切りはあるし、今日も戻ってから仕事するよ」と答えましたが、考えればそんなこと相手の知らない事情ですね。どうも翻訳の仕事といってもわかりにくいところがあるようなので、どうやって仕事を受けて進めているか、ちょっとその辺りを書いてみようと思います。

翻訳は締め切り仕事です。つまり、納期までに仕上がれば、昼に仕事をしようが、夜に仕事をしようが、いっそ1日休みにしようが、逆に1日中働いていようが自由です。私はフリーランスで複数の会社から依頼を受けているので、いまでも、出版社からの本を訳す案件(3月まで)と、企業の書類などを扱う翻訳会社からの案件(数日後)の締め切りがあります。はい、ありがたいことに、たいいていは締め切りがあるわけです。そうするとですね、終わらなかつたらどうしようと不安で、つい毎日、仕事をしてしまうのです。冒頭の友人の質問に、私が「？」と思ったのは、「休む」という発想があまりなかったからですね……。

ここでドイツ語の翻訳らしい話をしておきますと、ドイツ語の専門用語は独和辞典で見つからないことが少なくありません。そういう場合は、ドイツ語でそのまま検索して当たりをつけてみたり、画像検索にかけてみたりします。また、独→英、英→日ですと入手できる情報量が多いので、英語をはさんで調べると見つかることもよくあります。こういう調べもので予想外に時間をとられることがあるため気を抜けないのです(原著者がよくわからないことを言い出すこともあるし)。

仕事の依頼はほぼメールで来ます。スケジュールに応じて、引き受けるかを返事します。取引しているのは東京や大阪の会社です。いまはファイルのやりとりもメールでしますから、地方のデメリットを感じたことは私はないです。受けた仕事は自作のスケジュール表に書き込んで、いつまでにどのくらいの分量を作業すればいいか、ひと目でわかるようにしています。それを見ながら、今日は納期の近いこの仕事を先に終わらせて、それからこっちの長期案件にとりかかるといった感じで進めています。

先ほど少し触れたように、私は出版翻訳と実務翻訳と呼ばれる2つのタイプの翻訳をしています。実務翻訳というのはあまり聞き慣れないかもしれませんが、

記事、マニュアル、論文など、たいていは大元のクライアントから翻訳会社が依頼を受けて発生する翻訳です。納期は1~2週間のこともあれば、1か月、短ければ1~2日のこともあります。この辺りは、時間のかかる出版翻訳との大きな違いですが、両者の翻訳で私が強く意識していることがあります。それは実務翻訳ではほぼ読み手＝クライアントなのに対し、出版翻訳では依頼主（出版社）と読者の2つの存在があるということです。つまり、実務翻訳では読む必要があつて訳されるけれど、書籍では読者がその本を読む義務なんてないということです。いつ途中でやめてもいいのです。何百ページもどうやって読んでもらうか、文のリズムや、かな漢字のバランスも含めて「読ませる」ということをいつも考えています。

（ところで、自由に書かせるとこんなあほうな文章ですが、私のいままで訳した本は、理学療法、経済、心理学と難しいものが多いです。なぜでしょうか。わかりません）

さて、翻訳には周辺業務というものもあります。そのひとつが、ひとが訳した文章に誤訳や抜け、誤字などがいないかを確認して修正するチェックです。チェックの仕事はしないひとも多いのですが、私の場合、翻訳のかけもちより頭の切り替えがしやすいので積極的に受けることにしています。しかも、面白いことに、大半はドイツ語のチェックです。インバウンドなどの関係で、日本語の文章を翻訳する需要は増えています。そういった日本語をドイツ語ネイティブが訳した文に間違いがないか見ていくのです。はじめてこの案件の打診を受けたときは、「ネイティブの文章を日本人の私がチェックするなんて」と怯みました。けれど当時は、来た仕事は断らないと決めていましたから、緊張しつつも引き受けたのです。

ひとの訳文に手を入れるからには、修正の理由を明確に説明できる状態にしようと思いました。改悪だけはしないようにと、文法書や検索でしつこく確認していきました。この作業は本当に勉強になりました。とくに日本語からドイツ語という、ふだんの翻訳とは逆の方向から2つの言語を見られたことは収穫でした。一時期、私はすごく上手な翻訳者さんのチェックを担当していたことがあります。そのひとは、日本語の「～を提供します」という文章を「こういうメリットが得られます」といった表現で訳していました。日本語では主体が「私たち」の文章を「あなた」に視点を切り替えて訳していたのです。あれ？と思って、いままで自分が受けとった企業や友人知人からのメールを見てみると、たしかに日本語なら「わたし」になる表現を「あなた」で表す文章がいくつも見つかりました

(例：Als Anlage erhalten Sie 直訳：添付にて～のファイルをお受けとりいただけます。よくある日本語なら：添付にて～のファイルをお送りいたします)。この発想の違い、視点の切り替えは自分の翻訳で大いに役立っています。

翻訳ではさまざまな内容を扱います。おかげで、新聞などを読んでも「これはあの案件と関係ある」と関心の幅が広がっていきます。ずっと学ぶことがあるのはしんどいけれど面白いものです。「10年続いて一人前」と言われる時期を何年か過ぎ、最近はコワーキングスペースという共有の仕事場に行ってみたり、きちんと休むことを意識したりしています。状況に合わせて模索しながら、これからも10年20年と続けていければと思います。



【私が翻訳したいろいろなジャンルの本の一例】

6. 創立 30 周年記念事業寄付者一覧

創立 30 周年記念事業に際して関係者から補助金や寄付金をいただき深く感謝申し上げます。

会員外では、ドイツ連邦共和国外務省から在日ドイツ連邦共和国大使館を通して文化事業の一部への助成をいただきました。来賓の方々からお祝いを頂き、また中澤康治様からは講演の謝礼を寄付に回していただきました。ともに厚く御礼申し上げます。

会員からいただいた寄付一覧は下記のとおりです。会員からの寄付金総額は 637,000 円でした。ありがとうございました。(敬称略、順不同)

鈴木克彬・和子	(株) 富運		
對馬良一・節子	杉本隆雄		
白倉卓夫・由美子	近藤基晴・洋美	井田喜代子	
西田洽司・五十鈴	島田卓爾	宮原喜利雄	平方秋夫・順子
澤田まゆみ	黒田桂子・好一	金井康夫	遠藤功・みほ
末永秀雄・マサ子	福田朋英	少林山達磨寺	川田正彦・正江
高野誠・広美	鹿山徳男	豊泉伊三男・珠江	三井聡
鈴木喜代	大熊富吉	伊藤敦	品川和男・弘江
深田勝弥	伊藤ゆきえ		
加藤幸輝	岡博子	吉田博文	立川統子
小田原由美	木暮綾子	後藤京子	矢内史
長谷川早苗	田口久美子	田部井欣司	福島浩二
渋谷ミドリ・ありさ・ナタリ		宮越俊一・リカ	
島村敦子・芙美江・和香江			
青木京子	山本すぎな	重野和男	日向泰史
新井和幸・美枝子	八木優子	大塚敬義	水尾謙作